

## 漢字書字学習低成績児における書字課題の空欄状態の生起背景とその支援について

教科教育・特別支援教育プログラム 芸術・身体・特別支援グループ

田丸 裕理

## 1. 目的

これまで学習面で著しい困難を示す児童の背景要因の一つとして、学習障害（以下 LD）による影響が指摘されてきた。一方、LD の診断がつかないものの通常の学習方法では効果が現れにくく、学習の低成績児が通常学級に在籍しており、その支援の必要性が指摘されている。したがって、低成績児を含む集団を対象とした一斉指導場面において適用可能な学習支援環境を整備することは特別支援教育において重要な課題である。

これまで低成績児の多くは、基礎的な読み書きの習得に困難を示し、特に漢字書字に困難を示す児童は、空欄が顕著に多いことが指摘されている（中村ら、2017）。漢字書字課題における空欄が生起する背景要因としては、書く漢字の字数や構成要素の複雑さ、書字課題方略の欠如や動機づけの問題などが影響することが予想されるが、この点についての検討は十分になされていない。また、漢字書字における低成績児がどのような特別支援ニーズを有しているのか十分に明らかとなっていない。よって、各学年における漢字書字の低成績児が示す空欄状況の特徴について検討する必要がある。その上で、効果的な漢字書字支援方法について検討する必要がある。

従来の漢字書字支援方法に関しては、個別指導場面での漢字の「構成要素」を分解、または合成を通じて構成要素を意識化する手続きが有効であることが指摘されている。高橋（2021）は、漢字を構成要素にわけ音声言語化する支援を行い、構成要素と聴覚法を用いた漢字学習が有効である児童を報告した。

一方で、これら構成要素の意識化を目的とした漢字書字支援方法が、低成績児を含む集団を対象とした一斉指導での有効性については明らかにされていない。低成績児の漢字書字では空欄が多いことが指摘されていることから、学習支援の実施に伴う書字の様子の変化を検討することによって、一斉指導場面で適用可能な漢字書字学習支援方法について検討できる。

そこで本研究では、漢字書字課題での低成績児が示す

書字困難の特徴を空欄の出現様相との関連で検討する。その上で、低成績児を含む集団に対する一斉指導場面で適用可能な構成要素を意識化させた漢字書字支援を実施し、低成績児における書字成績の変化と、その効果と課題について検討することを目的とする。

## 2. 小学2・4・6年生における漢字書字低成績児に関する検討（研究1）

## 2-1 目的

漢字書字の低成績の特徴と背景要因について、漢字書字テストと Strength and Difficulties Questionnaire：子どもの強さと困難さアンケート（以下 SDQ）の評価から検討を行い、低成績の児童の特徴について考察することを目的とした。

## 2-2 方法

**対象：**公立小学校に在籍する小学2・4・6年生の児童218名を対象とした。学校長と担任教諭に対して研究趣旨や内容について文章にて説明を行い、実施に関して文面にて同意を得た。保護者には、学校を通じて研究趣旨や内容について説明がなされた。研究協力ができない場合は学校を通じて問い合わせられるように配慮した。**漢字書字：**漢字書字テストは通常の教育活動において実施されたものを用いた。各漢字書字テストは、実施学年の学年配当漢字10問により構成されていた。

**手続き：**漢字書字テストは、202X年11月～12月に全3回実施した。SDQによる評価は、著者と学級の担任教員が相互に実施した後評価内容の照合を行い、妥当であることを確認した。

**分析：**各学年の正答数における度数分布を算出し、下位20パーセント以下の児童を低成績児とした。漢字書字テストの反応の種類（以下 エラータイプ）について、「正答」「部首の誤り」「傍の誤り」「同音異字」「非字」「空欄」に分類した。低成績児における各学年の特徴を明らかにするため、各エラータイプを独立変数、学年を従属変数とする二要因分散分析を行った。SDQは、岡田ら（2016）の日本の児童における教師評定SDQの平

均得点を基に、支援ニーズの評価を行った。

### 2-3 結果

低成績児における各エラータイプを独立変数、学年を従属変数とする二要因分散分析の結果、学年要因とエラータイプ要因との間に交互作用が認められた。また学年要因での単純主効果が認められた。すべての学年群において「空欄」が他のエラータイプよりも有意に出現率が高かった（2年生「空欄」>「全エラータイプ」、4年生「空欄」>「同音異字」、6年生「空欄」>「部首の誤り」「傍の誤り」「同音異字」）。また低成績児では、SDQの多動/不注意の支援を要する事例が多かった。

### 2-4 考察

全学年において、低成績児において空欄の出現率が高く、空欄が低成績児の示す書字困難特徴であることが指摘できた。また、その特徴は2年生の時点でも生じていることが明らかとなった。また低成績児では多動/不注意の困難さを示す事例が多くおり、短時間で実施可能な学習課題の設定や注意を向けるポイントを明確にした学習課題の活用が有効である可能性が示唆された。

## 3. 小学2年生の低成績児を含む集団を対象とした構成要素を意識化させた支援の効果について（研究2）

### 3-1 目的

低成績児を含む集団に対して、通常の教育活動の中で、構成要素を意識化させる漢字書字学習プリントを用いた学習支援による、漢字書字の様相の変化について検討することを目的とする。

### 3-2 方法

**対象：**研究1に参加した小学2年生の1クラス30名を対象とし、研究1で実施した漢字書字テストにおいて、下位20パーセントの成績を示した5名を低成績児とした。倫理的配慮にして研究1と同様の配慮を行った。

**介入前における低成績の児童の実態：**漢字書字テストでは、空欄が多く見られた。また、学習面では、漢字書字学習に消極的な児童が多く見られ、授業中に立ち歩く場面が見られる児童も存在した。

**介入手続き：**対象となるクラス全体の児童に対して、漢字書字学習プリントを用いた学習支援を行った。1回の介入は20分程度で、プリントを終えた児童は、漢字ドリル学習を行った。漢字書字学習プリントでは、構成要素を意識化させることを目的に、構成要素のなぞり書き課題、構成要素を組み合わせ漢字を完成させる課題、児童自身が構成要素に分解し覚え方を考える課題によって構

成した。各課題を1枚とし、計3枚からなる漢字書字学習プリントを作成した。介入期間は12月から翌年1月までとした。通常の教育活動の中で全5回実施した。

### 3-4 結果

低成績以外の児童の漢字書字テスト平均正答数に向上がみられ、平均空欄数の減少が見られた。低成績児5名のうち1名で正答数が平均点を上回った。3名は漢字書字学習に対する意欲・意識に変化が見られた。一方で、低成績児1名は、成績・意欲・意識面での変化が見られなかった。

### 3-5 考察

低成績以外の児童の平均点の向上、空欄数の減少がみられた。また、低成績児においては、漢字書字学習に、積極的に取り組む児童が増え、一部の児童は、空欄を埋める様相が見られたことから、一斉指導の中で構成要素を用いた漢字書字学習の支援の有効性が示唆された。

## 4. 総合考察

多動/不注意にリスクがあるとされた児童は、漢字書字に困難さを示す可能性が高まることから、低成績の背景要因について情緒や行動面からの検討を行う必要がある。また、何かしら書き出すことができるのにも関わらず、空欄でテストを提出してしまう可能性が考えられる。そのため、途中点を加味した採点を行うことによって、途中まででも書く姿が見られる児童が増える可能性が考えられ、空欄の減少に影響を及ぼす可能性について検討を行う必要がある。更に、低成績児は、自己調整学習を困難としているため、空欄を多く示す可能性が考えられる。低成績児が書字可能な数を目指して立てることや、学習者が学習しやすい認知特性に配慮した学習方略の選択可能性について、検討を行う必要がある。

## 5. 引用文献

中村理美・中知華穂・銘莉実土・小池敏英（2017）小学2～6年生における漢字書字低成績の背景要因に関する研究. 特殊教育学研究, 55(1), 1-13.

岡田香織・柴田由己・能島頼子・小島里美・福元理英・野邑健二（2016）教師による児童の適応状況の Strength and Difficulties Questionnaire (SDQ) を用いた評価—臨床評価、保護者による評価との関連—. 児童青年精神医学とその近接領域, 57(2), 310-322.

高橋月（2021）聴覚法を取り入れた覚え歌による漢字指導の工夫—より多くの児童が楽しく学習する姿を目指して—. 教育実践研究, 31, 1-6.